

## 『源氏物語』と『白氏文集』——類似表現の検討——

丹羽博之

### 要旨

『源氏物語』の桐壺巻に、亡き桐壺更衣の母君を帝の使い命婦が訪れ、帝の言葉伝え、共に亡き更衣を偲ぶ名場面がある。娘を亡くした母君の歎きのことは「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、」について『河海抄』には「莊子曰寿則多辱」という注がある。しかし、「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、」の「いとつらう」と『莊子』の「寿則多辱」の「辱多し」とでは、かなり意味がずれる。

一方、白楽天の「感旧」の詩は、二十年の間に親しい四人の友人が次々に亡くなり、自分だけが生きながらえた実感を結びの句で「人生莫羨苦長命 命長感旧多悲辛（人生羨むこと莫かれ 苦だ長命なることを 命長ければ旧に感じ 悲辛多し）」と直截に表現しており、読者の心を打つ。晩年の白詩には、このような飾り気の無い率直な表現が多い。親しい人々を次々と亡くした実感を素直に述べており、万人の心を打つもののはれが詠まれている。

白氏文集を愛読し、『源氏物語』の中に多く利用した紫式部はこの詩も知っていて、桐壺巻に利用した可能性もある。『源氏物語』の中には『莊子』を利用した明確な例は「寿則多辱」を除けば認めにくい。従来注の検討を行い、白詩との関係を考察する。

キーワード…紫式部 源氏物語 白居易 白楽天 白氏文集

紫式部が『源氏物語』を書くにあたって幾多の先行作品を利用したことは、既に多くの先学の研究がある。和漢比較文学の発展、深化に伴い、『源氏物語』が漢詩文、就中、『白氏文集』をよく利用したことが次第に明らかになって来ている。

本稿では『源氏物語』桐壺巻の亡き桐壺の更衣の母君の言葉と『白氏文集』の詩句の類似性を考察したい。

一

まず問題の箇所を挙げる。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見たまひはてず。「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はむことだに、恥づかしう思ひたまへはべれば、ももしきに行きかひはべらむことは、ましていと憚り多くなん。

(本文は旧日本古典文学全集『源氏物語』桐壺)

娘を亡くした母君の歎きのことば「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、」について『河海抄』には「莊子曰寿則多辱」という注がある。『河海抄』は良く似た表現が『莊子』にあると指摘しているのだけなのか、紫式部が『莊子』の表現を利用して母君の発言を創作したと注をしているのか判断のしにくいところである。『莊子』を挙げるのは『河海抄』が一番古いようで、それを受けて『孟津抄』『岷江入楚』『湖月抄』などが『莊子』を挙げる。その一方、後述するように文脈、文意の微妙なずれを考慮したためか、『花鳥余情』『一葉抄』『弄花抄』『細流抄』などは『莊子』を挙げない。

近代以降の注釈書では、「旧日本古典文学大系」は『莊子』を挙げず、玉上琢彌氏『源氏物語評釈』は、「寿則多辱」によった言葉か。

と疑問の形で挙げておられる。

一方、新旧日本古典文学全集、日本古典集成、新日本古典文学大系は『莊子』を挙げる。

次に『莊子』（天地第十二・第六 堯・華封人問答 — 帝郷寓話）の該等箇所の前後の文脈を検討する。

堯觀乎華華封人曰「嘻聖人請祝聖人使聖人壽」堯曰辭「使聖人多男子」堯曰辭「封人曰「壽・富・多男子人之所欲也女獨不欲邪」堯曰多男子則多懼富則多事。壽則多辱。是三者非所以養德也故辭、封人曰始也我以女為聖人邪。今然君子也。点生万民必授之職多男子而授之職則何懼之有。富而使人分之則何事之有。夫聖人鶉居而鷄食鳥行無彰天下有道則与物皆昌天下無道、則脩德就聞千歲厭世去而上僊乘彼白雲至于帝郷三患莫至身常無殃則何辱之有。封人去之堯隨之曰「請問」封人曰「退已」

（本文は漢文大系『莊子』集英社）

この箇所、やや難解な寓話であるので、参考までに日本語訳を漢文大系『莊子』（赤塚忠氏訳・集英社）によって挙げる。

帝堯が華山の風景をめでていた。華山の封人が、帝堯を見て、「ああ、これは聖人でいらつしやいますな。どうか聖人の幸運を祝福させて下さい。聖人のお命が長いように祈りましょう。」と言った。

帝堯は「お断わりする」と言った。

「では、聖人が富み栄えるように祈りましょう」と封人が言った。

帝堯は、また「お断わりする」といった。

「聖人にたくさんの男の子が恵まれるように祈りましょう」と封人が言った。

だが、帝堯は、またしても、「お断わりする」と言った。

そこで、封人が「長命・富裕・多くの男の子は、人々だれもが欲しがっているものです。ところが、あなただけが欲しがらないのはなぜですか」と尋ねた。

帝堯は、「たくさんの男の子があれば、兄弟で争い合うことになる憂いが多い。

富み栄えれば、それを守るのに煩わしい事が多い。長命であれば、この世の辱めに遭うことが多い。この三つのことは、我が安静な徳を長養するすべではないのである。だからお断わりした」と答えた。これを聞くと、封人は、「先には、私はあなたを聖人であろうと思っ

ていました。だが今は君子だと知りました。天が万民をこの地上に生まれ出させるや、必ずそれらに生きる職業をお与えなさります。そこで、たくさんの男の子があつて、それぞれに職業をお与えになるならば、それぞれが榮えて、なんの憂えることありません。や。あなたが富んでいてそれを人々に分けて持たせるようにしたならば、それぞれが富を治めて、なんの煩わしい事などありません。や。いったい聖人は、鶉のように遁世して穀のように自然の生活に満足し、空飛ぶ鳥のように自由に行つて俗世の煩い受けることはないのです。天下に道が行われているときには、世上のさまざまの物とともに繁榮し、天下に道が行われていないときには、独りその徳を修めて静安さを全うします。こうして、千年もの寿命を保つてこの世の生活を十二分に尽くすと、天に舞い上がり、あの白雲に乗つて、上帝のいます郷に到着します。ここでは、三つの患いはやつて来ようもなく、その身には常に災いがありません。それだから、なんの辱めなどありません。や」

と言つて、立ち去りかけた。

帝堯はそあとに追いつがつて、「どうかお話を聞かせてください」

と頼んだが、封人は「お下がりがなされ」

と言つて、立ち去つてしまった。

人間の三つの欲望のややこみいった寓話の一つであり、帝堯は「長生きすると辱めにあうことも多い」と述べる。長生きすると他者から辱めを受ける事が多いという意味であろう。桐壺更衣の母の、長生きをしたために、娘に先立たれるという不幸にも遭遇し、「命長さの、いとつらう」ともならず、ため息にも似た老いた我が身の歎きとではかなり意味、文脈にずれがある。玉上琢彌氏が疑問の形で挙げられたように、『莊子』と結び付けることは文脈の上からもふさわしくないと考えたからか、『花鳥余情』などは、『莊子』を挙げない。

次に、この度気づいた『白氏文集』中の「感旧」の詩と「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに」とを検討する。  
晩年洛陽に退いた白楽天は、長命の結果、多くの親しい友人を亡くした悲しみを次のようにうたう。

### 感旧 并序

故李侍郎杓直、長慶元年春薨、元相公微之、大和六年秋薨、崔侍郎晦叔、大和七年夏薨、劉尚書夢得、會昌二年秋薨。四君子予之執友也。二十年間、凋零共尽。唯予衰病至今独存。因詠悲懷、題為感旧。

（故李侍郎杓直は長慶元年春に薨ず。元相公微之は大和六年秋に薨ず。崔侍郎叔は大和七年夏に薨ず。劉尚書夢得は會昌二年秋に薨ず。四君子は予の執友なり。二十年の間に、凋零し共に尽く。唯だ予のみ衰病して今に至も独り存す。因りて悲懷を詠じ、題して感旧と為す。）

晦叔墳荒草已陳 晦叔が墳は荒れて 草已に陳り

夢得墓濕土猶新 夢得が墓は濕りて 土猶ほ新し

微之捐館將一紀 微之は館を捐て 將に一紀ならんとし

杓直婦丘二十春 杓直は丘に婦りて 二十春

城中雖有故第宅 城中に 故第宅有りと雖も

庭蕪園廢生荊榛 庭蕪れ園廢れ 荊榛生ず

篋中亦有旧書札 篋中に亦た 旧書札有り

紙穿字蠹成灰塵 紙穿たれ字蠹し 灰塵と成る

平生定交取人窄 平生交を定め 人を取ること窄く

屈指相知唯五人 指を屈するに相知 唯だ五人のみ

四人先去我在後 四人先づ去りて 我のみ後に在り

一枝蒲柳衰残身 一枝の蒲柳 衰残の身

豈無晚歲新相識 豈に晩歳の新相識無からんや

相識面親心不親 相識は面親しきも 心親しまず

人生莫羨苦長命 人生羨むこと莫かれ 苦だ長命なることを

命長感旧多悲辛 命長ければ旧に感じ 悲辛多し

[6935] 会昌二(八四二)年・七十歳・洛陽での作。本文は那波道円本によった。以下、白詩は全て同書による。作品番号、製作年、場所は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』(朋友書店)によった。]

おおよその意味は、

故李侍郎杓直は長慶元(八二一)年春薨じ、元相公微之は太和六(八三二)年秋に薨じ、崔侍郎晦叔は、大和七年夏に薨じ、劉尚書夢

得は、会昌二(八四二)年秋に薨じた。四君子は私の親友であった。二十年間のうちに凋零して皆いなくなった。唯私だけが老い衰え、

病氣がちではあるが今に至るまで一人生きながらえて来た。それで、悲しい心の内を詩に詠み、「昔のことを感じて」と題した。

晦叔の墳は荒れはてて墓辺の草も古くなり、亡くなったばかりの夢得の墓はまだ湿りを帯び墓土も新しい。

微之はこの世を去って十二年になろうとし、杓直はあの世に旅だつて二十年。

町中には故人の第宅は残っているが、庭園は荒れ果てて雑草が生い茂っている。

篋の中には彼らの昔の手紙が残っているが、紙には穴があき、虫食いだらけで灰や塵になろうとしている。

平生から交際範囲は狭く、指おり数えて知人は五人だけ。

四人は先立って私だけが取り残された。蒲柳の一枝のような衰残の我が身。

年を取ってからの知り合いもいなくはないが、新しい知り合いは表面は和やかだが心から親しむことはない。人生のあまりに長生きす

ることは羨んではいけない。

長生きするといろいろと昔の事を思い出して悲しくつらくなることが多いものだ。

というもので、この二十年の間に親しい四人の友人が次々に亡くなり、自分だけが生きながらえた実感を感じの句で「人生莫羨苦長命 命長感旧多悲辛」と直截に表現しており、読者の心を打つ。晩年の白詩には、このような飾り気の無い率直な表現が多い。親しい人々を次々と亡くした実感を素直に述べており、万人の心を打つもののは詠まれている。結びの句がこの詩の眼目であることは言うまでも無いことであろう。白樂天時に七十一歳、死の四年前の作である。

長生きすることは誰しも望むことであるが、その反面、多くの親しい人の死に出会わなければならないという道理を白樂天は体験した。この「人生莫羨苦長命 命長感旧多悲辛」のうめきにも似た白樂天の心境の方が、桐壺の更衣の母君が娘に先立たれて漏らした「命長さの、いとつらう思ひたまへしらるるに」の心情に近い。老年になって親しい友人と死別したり、娘に先立たれた時に、ふと漏れるのは「命長ければ悲辛多し」であろう。「莊子」の「寿則多辱」の「多辱」とではかなり意味がずれる。「莊子」の場合は架空の崑山の封人の寓話の一つであり、莊周の言葉でもない。「寿則多辱」の逆説的な言い回しは虚を突かれた感じで胸を打たれるが、白樂天や、更衣の母の亡き人を悼み、己が長命を恨めしく思う心情とは異質である。

『白氏文集』には、「読莊子」(0890・3153)の詩もあり、白樂天も『莊子』は愛読していたが、彼の作品の中に「寿則多辱」の影は見出し難い。

更衣の母君の年齢は不明だが、恐らくは三十半ばから四十過ぎぐらいであろう(吉海直人氏『源氏物語の視角』七二頁 翰林書房)。夫を亡くし、今また娘にも先立たれた母君の状況は次々と四人の親友に先立たれた老年の白樂天の心境と相通する。

亡き桐壺の更衣の邸宅の荒れはれた様子は、

闇にくれてふし沈みたまへるほどに草も高くなり、野分にもいとど荒れたるここちして月影ばかりぞ八重葎にさはらずさし入りたる。

と描写されている。荒廃した邸宅の象徴として手入れがされずに雑草が高く生い茂ったという表現も、先に挙げた白詩の「城中故第宅有りと雖も庭蕪れ園廢れ荆榛生ず」と似通う。

「平生定交人窄 屈指相知雖五人」という白楽天の交友態度も内向的な性格であった紫式部の琴線に触れるものであろう。新聞一美氏は、

長夜に君先づ去りんたり 残んの年我幾何ぞ 秋の風に襟涙に満つ 泉下に故人多し（『和漢朗詠集』卷下・懷旧742 「微之敦之晦叔相

次長逝。歸然自傷、因成二絶。其二『白氏文集』64:3079 太和七〔832〕年・62歳）

の詩句と『源氏物語』の

野分だちて、にはかに膚寒き夕暮れの程、常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣す。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

（桐壺帝）

などに見える「秋風」から故人を連想し、涙を流す点に共通性を指摘されている（桐と長恨歌と桐壺卷―漢文学より見た源氏物語の誕生―）甲南大学文学部紀要 文学篇 四八 一九八二年。後に『源氏物語と白居易の文学』和泉書院（二〇〇三年）。新聞氏はこの他にも、桐壺の巻には『白氏文集』、就中、長恨歌を利用していることを綿密に論証されている。

吉海直人氏も述べておられるが、『源氏物語』には「命長さの、いとつらう思ひたまへしらるるに」と類似の表現が多い（『源氏物語の視角』・翰林書房）。

① 命長きは心憂く思ひ給へらるる世の末にも侍るかな。（須磨卷）

② 命長さのうらめしき事多く侍れど。（朝顔卷）



③ 命長くてかかる世の末を見ること。(少女卷)

④ 長き命いとつらく覚え侍る。(早蕨卷)

など八例を挙げておられる。この八例にも『莊子』を挙げる注釈書があるが、これらも長生きをしたために却ってつらく悲しい目に会うことが多いの意であって「寿則多辱」ではない。『莊子』が『源氏物語』中に利用されたとされる箇所は、古沢未知男氏『漢詩文引用から見た源氏物語』や最近の注釈書類を見ても「寿則多辱」だけである。しかし、源氏物語の「命長さの、いとつらう思ひ」の表現は先に考察したように、白詩の表現との類似性の方が高いと思う。そうすると『源氏物語』の中で『莊子』を明白に利用した箇所は皆無となる。『源氏物語』の『白氏文集』利用については、今更贅言を重ねるまでも無かろう。文脈の類似性に加えて、『源氏物語』における『白氏文集』『莊子』の利用度からも、『白氏文集』からの影響を先ず考えるべきである。

『莊子』の死生観として、先ず思い浮かぶのは、莊子の妻の死んだ際の話であろう(至樂十八)。亡き妻の前で両足を投げ出して座り、ほろろとたたきながら歌っていた莊子が、くやみに訪れた友人の詰問に対して、妻は無から生まれ、無に帰っただけで天命であると答えた。死生を一つと見て、これを超越する立場を述べた段として有名である。

また、「至樂十八」に見える鬻饅との会話で、鬻饅が「再び生き返ることなどとてもない。まっぴらごめんだ」と答えた死の世界の賛美(「至樂十八」)等が『莊子』の死に対する思想である。

これらの『莊子』の死生観は、『源氏物語』桐壺の更衣を追慕する帝や母君命婦を始め、読者にとつても到底受け入れられないものである。すぐあとの長恨歌引用や桐壺巻全体に濃厚に見える『白氏文集』の利用から考えて、白詩の「感旧」詩の表現は無視できない。白楽天七十一歳の老いの実感の方が『莊子』の虚構の寓話よりも紫式部の脳裏に強く残ったであろう。

次に『源氏物語』以前の作品の「命長きはつらき」の例を考察する。勅撰三漢詩集、『田氏家集』『昔家文章』等には例が見えないが、僅かに『本朝文粹』（卷十四）に次の例がある。

在原氏為亡息員外納言四十九日修諷誦文

後江相公

敬白 請諷誦事

三宝衆僧御布施法服一具

右、員外納言、受病之時、變風儀而脫俗累、臨終之日、落雲鬢而歸空王。仍擊此方袍之具、捨彼円照之庭。妾少後所天、独流血涙於眼泉、老哭愛子、誰抽紫筍於雪林。人皆以短命為歎、我独以長壽為憂。若有過死、豈逢此悲。灯前裁縫之昔、曳竜尾之露、涙底染出之今、任鸞頭之風。魂而有靈、受此哀贈。所請如件。 敬白。

天慶六年四月廿二日 女弟子在原氏敬白

在原氏亡息員外納言四十九日の為に諷誦を修する文

後江相公

敬白 諷誦請くる事

三宝衆僧御布施法服一具

右、員外納言、病を受くるの時、風儀を變じて、俗累を脱し、臨終の日、雲鬢を落として空王に帰す。仍て此方袍の具を撃て、彼の円照の庭に捨つ。妾少くして所天に後れ、独り血涙を眼泉に流す。老いて愛子を哭す。誰か紫筍を雪林に抽かん。人皆短命を以て歎き

と為す。我独り長寿を以て憂と為す。若し<sup>まが</sup>遣に死すること有らば、豈に此の悲しみに逢はんや。灯前に裁縫の昔は、竜尾の露を曳き、涙底染め出だすの今は、鶯頭の風に任す。魂にして靈有らば、此の哀贈を受けよ。請ふ所件の如し。敬んで白す。

天慶六年四月廿六日 女弟子在原氏敬白

(本文・訓読は柿村重松氏『本朝文粹註釋』による)

老いて子を亡くした悲しみを「人皆以短命為歎、我独以長寿為憂」と表現する。柿村重松氏『本朝文粹注釈』の頭注には「人は皆短命をかこてども、我は独り吾が寿の長きを歎くなり」とあり、ここでも長命故に恥をかくことが多いの意味ではない。また、『莊子』も挙げていない。おそらくは、柿村氏は、この諷誦文と『莊子』の文脈のずれから挙げられなかったであろう。「長寿為憂」は「命長きは心憂く思ひ給へらるる」(須磨)の心情に近い。紫式部の脳裏には、この大江朝綱の諷誦文もあったかもしれない。また、朝綱は前掲の白詩「感旧」を意識して作文した可能性もある。

この他、『世俗諺文』などにも「寿則多辱」の語はみられず、『土佐日記』を始め、『源氏物語』以前の和文作品にも見えない。若くても次に早世し、四十で長命の算賀を行っていた当時において「寿則多辱」の思想はなかなか日本人には受け入れられなかったのではないか。

次に『源氏物語』前後の和文作品中に見える命の記述をみる。『宇津保物語』には以下の記述がある。

白き袴の袴一襲を脱ぎ奉りて「あな命ながや」とて御衣掛のもとに寄りて見給へば

(蔵開上『宇津保物語』岩波古典文学大系による)

旧大系本の頭注には、「長生きをするように」。当時の祝言葉であろう、とある。この他にも、以下のような例がある。

いぬ宮生まれたまひて後は、いよいよいのちもおしう、おもふ事あるまじ

(同様のの上の上)

八九十よまでの命ありて、めでたきすゑの世をあくまでもに給ふらん

『源氏物語』と『白氏文集』

(同様の上的下)

いかでか、そこにもこゝにもまんざいのいのちよはひもがな

(内侍のかみ)

など『宇津保物語』には命に関する言辞があるがその多くは命を惜しみ、長命を望むものである。やや時代は下るが、『栄花物語』にも命に関して述べた場面がある。皇后定子の崩御の場面で帥殿(伊周)は亡骸に対して

「日来物をいと心細しと思ほしめしたりつる御けしきもいかにと見奉りつれど、いとかくまでは思ひきこえさせざりつる。命長きは憂き事にこそありけれ」とて「いかで御供に参りなん」とのみ、中納言も帥殿も泣き給ふ。

卷七鳥辺野(本文は松村明『栄花物語全注釈』角川書店による。以下同じ。)

和田英松・佐藤球共著『栄華物語詳解』(明治書院・明治四〇年刊)には「命長きは云々は、世の諺に、しかいへるなるべし。莊子天地篇に、多男子則多懼、富則多事、寿則多辱、是三者非所以養徳也とあるなどよりやいひけん」とある。『河海抄』等に影響を受けたものであろうか。(以下要推敲)「寿則多辱」と長命故に親しき人との死別を経験して「命長きは憂き事にこそありけれ」と独りごちるのとではかなりの隔たりがある。また「命長きはうきこと」は前掲の大江朝綱の「長寿為憂」により近い表現である。『栄花物語』には、この他にも以下のような表現がある。

命ながからんを嬉し、なからむを口惜しと思はばこそあらめ、ただ仏の告げさせ給ひつる、嬉しきなり。

(卷二十九たまのかざり)

院(彰子) いみじうあはれなる事をいと、おほしめし、「我命長きこそ恥しけれ。宮は心にまかせたるやうにこそものし給けれ。かくちにおくれ奉りて、一日にてもあらんと思ひけんや」とおほしの給はず。

(卷三十三きるはわびしとなげく女房)

上東門院のおぼしめし歎かせ給ふさま、いふ方なし。「命長くてかかる御事を見る事」と人の思ふらん事をさへ添へておぼし惑せ給ふ。

(卷三十六根あはせ)

これらの例も、親しい人の死に対して我が身の長命を思い、このような辛い悲しい出来事に出会った思いを述べており、前掲の白詩の「命長感旧多悲辛」に近いといえよう。

『源氏物語』以前の和文作品には「寿則多辱」は見えなかったが、中世になってようやく『徒然草』にあらわれる。

住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ辱多し。

(七段)

これは明らかに『莊子』を利用してゐる。しかし、『莊子』は長生きをすると辱めを受けることが多いと述べているのに対して、『徒然草』は「みにくき姿を待ちえて何かはせん。」というのだから、老残の醜さゆえの恥多し、ということで微妙にニュアンスは異なる。『河海抄』と『徒然草』の成立は近く、『莊子』の「寿則多辱」はこのころになってようやく日本で広まって行ったのではないか。

## 結 び

『河海抄』が『莊子』の「寿則多辱」を挙げて以来、『源氏物語』の注釈書に引かれることが多いが、意味のずれを感じる。より文脈に即した例として、白詩の「感旧」詩を挙げるができる。白詩の「感旧」の表現の近さ、詠まれた事情の類似性、及び『源氏物語』に見られる『白氏文集』の受容の密度と源氏物語の『莊子』受容度を考えた場合、「命長さの、いとつらう思ひたまへらるるに」の背景には先

ず白詩があつたと考へるべきであらう。

\*本稿は、平成十一年度中古文学会秋季大会(一九九九年十月十七日於奈良女子大学)での研究発表、

『源氏物語』桐壺卷の「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに」の背景——『白氏文集』卷六十九「感旧」詩との検討——  
に基づく。発表の前後に質問、助言をくださった諸氏に御礼申し上げます。